

# 村上忠順翁顕彰会報



かねてより 雲みとこそハ 聞しかど  
さらにおどろく 不二の高嶺か

夢にまでみた富士、その雄大な姿に感動した忠順の歌  
(村上忠順集『草分衣日記』より)

## ★ 目次 ★

- 会長の言葉 - P.2  
忠順先生の生き様から学ぶ 石川 嘉仁
- 女性部研修会感想文 - P.3  
「岩瀬文庫見学を中心に」 神谷磨利子
- 歴史探訪感想文 - P.4  
駿府城と日本平 杉浦康孝
- 『座右記』読了記 - P.5  
塩村 耕
- 井上文雄判『百番歌合』について (一) - P.6  
中澤伸弘
- 令和7年度活動報告 - P.8
- 第20回「忠順大賞」 - P.8~10

村上忠順翁顕彰会報 第37号

<https://www.murakami-tadamasa.jp>

編集 村上忠順翁顕彰会事務局

発行 令和8年3月31日

## 忠順先生の生き様から学ぶ



村上忠順翁顕彰会

会長 石川 嘉仁

日頃は当顕彰会活動に対しましてご理解・ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

平成元年に設立された村上忠順翁顕彰会も令和八年度三十七年目を迎え、会員の皆様からのご支援をいただき、多くの活動ができたことに対し大変ありがたく思っています。令和七年度も前林中学校で「村上忠順物語」を題材とした、一・三年生の道徳授業をお願いし、村上忠順翁の生き様や考えを伝える活動を実施することができました。生徒さんたちが、忠順翁がなぜ地元の方から愛されたのか、自分が人から愛されるためにはどんな行動が必要になるか等、熱心に考えている姿が印象に残っています。私も初めて授業に参加し、現代社会が忘れかけている大切な考えが忠順翁の生き様には

存在していると話しさせていただき、耳を傾けてくれて、本当に貴重な時間を生徒の皆さんと過ごすことができました。道徳授業への参加も二年目の活動となりますが、

今後子どもたちに忠順翁の生き様を知ってもらい、これからの長い人生を歩んでいく際の道標にしていただければありがたく思います。佐久間校長先生をはじめ、準備頂いた各クラスの先生方に感謝致します。

また、令和八年度には児童生徒さん向けに、忠順翁と顕彰会を紹介するリーフレットを制作・配布していく予定です。前林学区に縁あつて暮らす地域の子供たちに向けて、しっかりと顕彰活動を展開していきたいと考えています。

四方樹大学については、年四回の講座で元名古屋大学の塩村先生の軽快なトークで毎年楽しませていただいています。その折に読んでいた忠順翁の日々の出来事が記録された『座右記』については、全部読み終えることができました。塩村先生の読了記の中でもありがたいお言葉をいただき、二〇一八年八月から長きにわたり関わって

ただけたことに、心から感謝を申し上げます。今後も新たなテーマのもと、顕彰会活動の核となる活動として取り組んでいければと思います。

世界を見渡せば、ウクライナ対ロシア、ガザ地区での対立など各地で戦争や紛争が後を絶たず、いまだに収束の兆しが見えません。加えて自国利益を優先し様々な動きや駆け引きが見え隠れするなど、混沌とした情勢にあります。人の欲や国の利益だけにとらわれることなく、少しの優しさや思いやりを持ち合わせ、欲で行動することが無くなれば、平穏な世の中へとすすんでいくことは言うまでもありません。悲しいニュースを見聞きする時は、いつも忠順翁の生き様を学んでほしいと感じています。故郷を大切に、家族や地域の方々日々想いを寄せながら生涯を貫き通した忠順翁の優しさと強い信念を、ひとりでも多くの方に伝えていく顕彰会活動を、これからも地道に積み重ねていきたいと思っております。今後とも一層のご支援を宜しく願います。



## 女性部研修会感想文

――岩瀬文庫見学を中心に――

刈谷市東境町 神谷磨利子

年に四回の四方樹大学の日を毎回楽しみにしております。今年度の女性部研修会の案内に、目的地は西尾市、岩瀬文庫で企画展「江戸の出版文化と蔦屋重三郎」の展示見学とありました。しかも四方樹大学講師の塩村耕先生の解説付きというプランに引かれ、市外在住ながら、すぐに参加をお願いしました。

当日九月三十日は朝から青空の広がる気持ちの良い日でした。岩瀬文庫では地下研修室で岩瀬弥助さんのこと、岩瀬文庫のなりたちについてDVDの鑑賞をしました。

その後は三班に分かれて館内見学です。先ず手を洗ってから、塩村先生の調査部屋に入ると、大きな机の島が三つだったか、かつてそこで学生さんたちも集まって古典籍書誌データベースを作ったというお話に緊張しました。先生はご自身所蔵三種類の和本（袋綴じ、画帖仕立て、卷子本）の特徴を説明してくださいました。中でも卷子本については、少しずつ開いて絵の場面に移る時は楽しい秘密を明かすかのようにでした。企画展示には先生所蔵の平賀源内『むかし



語はなさき男放屁論（へっぴりろん）』が出ておりますが、この卷子本も放屁の話で、先生はいたずらっ子の少年のように顔をほころばせてお話ししてくださいました。続いて閲覧室では学芸員さんから古典籍を見る際の作法を聞き、実際に手に取ってみました。

柳原文庫本『枕草子』や極彩色の挿画の奈良絵本『住吉物語』、NHK大河ドラマ「べらぼう」関連の朋誠堂喜三二作『文武二道万石通』、村上忠順編『三河の玉藻』

など、学芸員さんの選書は目をみはるばかりでした。企画展示では善と悪の文字を顔に付けた『堪忍袋緒べ善玉』の解説など面白く、あつという間に時が経ちました。細かな文字や描線は版木を彫り残したものと実感し、あちこちから感嘆の声が上がりました。

とんかつ錦での昼食は目もお腹も満たされました。炊き合わせに添えられたバターライプの青い花が夏の名残を留めていました。塩村先生とはここでお別れ。「西尾の岩瀬文庫、刈谷の村上文庫、豊橋の羽田八幡宮文庫は三河の精神（スピリット）だから」という先生の言葉が身にしました。

午後は西尾市歴史公園をガイドボランティアさんの説明で散策。西尾城といえば、忠順翁が藩医として仕えた刈谷藩土井家は、延享四年（一七四七）三浦義理の時に、西尾藩・土井利信と城替えがあったことに始まるのだと、忠順翁とこの地との縁に思いを馳せました。汗ばむ陽気の中を歩いた後に抹茶ミュージアムでいただいた抹茶は、殊の外美味しく感じました。

西尾の歴史と文化を堪能するプランを考えてくださった役員の皆様に感謝し、またの機会に参加させていただきたいと思いをしました。

## 歴史探訪感想文

### 「駿府城と日本平」旅に参加して

高岡町 杉浦康孝

令和八年二月二六日（木）高岡農村環境改善センターを発着とする歴史探訪ツアーに参加させていただきました。前日は雨、そして当日出発時は曇りでしたがバスで静岡に向かう中、徐々に晴れとなり、日本平到着時には快晴になっていました。四九名定員のバスに四七名乗車とほぼ満席でしたがスタッフの方々、参加者の方々の日頃の行いの良さから天に応援されているように感じました。

法隆寺夢殿を模した八角形の屋根を持つ「日本平夢テラス」は静岡産ヒノキを使った建物で、四七都道府県の木材を利用した軒庇の新国立競技場（MUFJスタジアム）を設計した隈研吾建築設計事務所作品だと納得できるものでした。夢テラス三階からの眺めは、冠雪の富士山、南アルプス、駿河湾、清水港、三保の松原、伊豆半島と三六〇度見渡せ、日本観光地百選、日本夜景遺産にも選定される価値ある景色でした。忠順翁も憧れの富士山の和歌を何首も詠まれたそうですが感動したことでしょう。レストラン「月日星」でも富士山を見ながら

地元食材にて舌鼓を打ち、敷地内には早咲きの桜も一部開花し贅沢な時間を過ごしました。

そして、大河ドラマでも人気なのは戦国時代と幕末維新の時代、徳川家康が今川氏の人質時代を過ごし、岡崎城、浜松城の次に拠点とし、征夷大将軍職を三男の秀忠に譲った後、大御所として西に睨みを利かせていた「駿府城」に向かいました。静岡県庁はお堀の中でありバス駐車場の横でも城の発掘作業中でした。県庁別館二十一階の眺めも素晴らしくボランティアガイドさん曰く年に数日しかない天候とのこと。幕末の慶応三（西暦一八六七）年、大政奉還、王政復古となり、慶応四（一八六八）年には鳥羽伏見の戦い戊辰戦争が始まります。有栖川宮熾仁親王が明治維新政府総裁兼大総督となり東征で駿府城に入場され本陣となります。

古文書に精通した人材が必要となり、御殿医であり『万葉集』、『古事記』、『源氏物語』等の古典を講義する国学者であった忠順翁に白羽の矢が立ち、刈谷藩に來訪依頼がきて駿府城に入城。既に西郷隆盛・山岡鉄舟会見、

勝海舟・西郷会談、西郷の総攻撃中止により江戸城無血開城が実現。熾仁親王の勧めで忠順翁は江戸城に留め置かれ後帰藩します。その後、江戸は東京と改称され、江戸幕府最後の將軍徳川慶喜公は駿府へ、そして明治元年となり、明治二（一八六九）年には五稜郭陥落幕府軍降伏、戊辰戦争終結となった歴史の転換点にかかわっていた郷土の偉人忠順翁を誇りに思います。四班に分かれたの街歩きで駿府城公園翼櫓・東御門、西郷・山岡会見地、現在は料亭浮月楼となっている慶喜公屋敷跡、歴史博物館等ガイドさんにご案内いただき歴史上の軌跡を感じられた貴重な体験となりました。

最後に、研究としての四方樹大学、短歌を縁とする忠順大賞、女性部研修会、歴史探訪バスツアー、前林中学校道徳時間での紹介等、充実した活動を継続されている村上忠順翁顕彰会スタッフ皆様のご尽力に敬意を表し、今後のさらなるご活躍に期待いたします。ありがとうございました。



## 『座右記』読了記

四方樹大学講師 塩村 耕

書き残された日記を精読することによって、二百年ほど前を生きた郷土の先人の人生に思いを致す。そんな幸せなことが出来るのは、日本人の中でも稀れだろう。

そもそも書物を通して見ぬ世の人を友とする(徒然草)ことほど、上質な楽しみは外にない。そんな経験を積み重ねた者を、教養ある人という。『座右記』読書会に参加された方は、鏡で自分の顔を御覧になるとよい、きつと良い顔つきになっているに違いない。したがって、地域の文化的事業として、これほど実質的かつ貴重な催しもあるまい。

私が読書会のお手伝いに参加したのは、二〇一八年八月のことだった。同じ西三河の西尾にある岩瀬文庫には長年関わってきたものの、そもそも神戸の生まれで三河に縁もゆかりもない上に、国学の世界は「敬して遠ざく」でやってきた私のような者が、そんな仕事を引き受けることは躊躇された。それが、いざ読み進めてみると、細部が頗る面白く、引き込まれていった。

たとえば忠順翁の堤の自宅や刈谷の役宅

に盗人が入った際の盗品の一覧があり、被害にあった衣類が並んでいた。また、刈谷城下の役宅を上納する際に、藩に返還した調度や処分した道具の一覧もあった。普通には表に現れてこない日常の一端が、そこから垣間見える。詳しい辞書にも載っていない、今は忘れられた語彙が登場することもしばしばであった。藩の役人との会話そのものが、口語交じりに書き留められていることが多いのも、当時の記録として珍しい。そんな風にも不思議と毎回、注目すべきトピックが出現して、少し調べの手を加えると興味深い事実が次々と明らかになり、話題に事欠かなかった。

そもそも村上忠順翁は、堤村の村医として平穩無事な人生を送ることも出来たはずだった。それが、四十二才の嘉永六年(一八五三)、刈谷藩医を務めていた父上の玄意さんが急死したため、俄に刈谷藩医の跡を継ぐことになった。本当は自分ではなく息子の明司さんに父の跡を継がせたかったが、それは息子が若すぎると許されなかった。つまり刈谷藩医となることは、忠順翁の本意ではなかった。



ところが、そのおかげで、刈谷藩医としての公務の備忘日記である『座右記』が後世に残されることになったし、また刈谷藩士という武士になることによって、忠順翁の人生に多彩さが加わった。人生の幸不幸は後になってみなければわからない。

『座右記』には、忠順翁が本領とした国学や和歌の世界は、ほとんど描かれない。大きな時代の変動期にあって、個人的な感懐も記されない。刈谷藩士としての日々を経験した種々の出来事が、淡々と記録されるに過ぎない。それがこんなにも読み応えがあるのは、忠順翁が書物とは何ぞや、記録とは何ぞやということをとことん考えた、「本の人」であったからである。いま『座右記』の全部を読みました、つくづくそのことを思う。

こんな面白い資料との出会いを下さった顕彰会、毎回、私の与太話に付き合わせてしまった参加者の皆さん、それからこの読書会を軌道に乗せて下さった故・築瀬一雄先生と故・新行紀一先生に、あらためて感謝申し上げます。



## 井上文雄判『百首歌合』について(一)

國學院大學兼任講師

中澤伸弘

村上忠順編になる、井上文雄判『百首歌合』について、今号から何回かにわたり解説を施してみたい。今回はその序文についてである。

村上忠順は安政四年十月に十人の門人知友に十の歌題を番へて歌を詠ませ、『百首歌合』を編んだ。「歌合」については以前にもふれたが、同じ題で詠んだ歌を左右に番へ、判者はその評を乞ひ優劣を競ふものである。良い方が「勝」、引き分けの場合は「持」と言つた。

この時の題は十月の季節にあはせて、風前落葉 海辺千鳥 雪中客来 月下神楽 山家歳暮 送書待恋 寄燈火恋 朝日如鏡 鐘声何處 松上群鶴の十題であり、出詠者は松永吉胤(尾張諸輪) 原田正時(三河三好) 僧在阿(不明) 釈龍海(三河三好与願寺) 桑門了観(三河竹村光恩寺) 石川純孝(三河吉原) 村上三千代(忠順妻) 村上八千代(忠順女) 酒井利亮(三河福田) 忠順の十名(掲載順)であり、何れも忠順周辺の三河尾張の歌人と家族で

ある。

忠順はこの判を安政二年秋の江戸行きで相識となつた江戸の井上文雄に願ひ、歌のつづりを送つた。文雄はこれに判を書いて、忠順のもとに戻つた冊子が、今刈谷の村上文庫(二二六五番)にある。忠順はこの頃「歌合」を編み、交流のある歌人に判を乞ふことを頻りにやつてゐて、前年の安政三年には清水謙光高島式部判「百四首歌合」、寺山吾鬢判「百首歌合」 同判「二百首歌合」、熊代繁里判「九十八首歌合」などがあり、また門人の「二十四首歌合」に自ら判を書きつけるなどかなり積極的であつた。

この『百首歌合』には序文もあり、完成した形で文雄のもとに届けられ、文雄は百番の全てに評を書き入れて返してゐる。文雄独特の文字で書かれてゐるから相違はない。実は会報の三十四号(令和五年)に井上文雄が添削した、忠順の歌合序文章稿について書いたが、忠順はそれとはまた別の序文をここにつけ、その制作の前後が定かではないものの、文雄はそれにも評を書いてゐる(※印の箇所)。ただこの序文は前年安政三年三月にまとめた別の『百首歌合』(寺山吾鬢判 村上文庫二二六三番 村上忠順叢書第四として平成十五年に翻刻(但し誤記などがある)と同じ序文であり、年

代から考へるとその転用となる。

### 百首歌合

歌合といふわざは在民部卿の家にてものしたる(※1)などやはじめなるべき それよりつぎ根合扇あはせなど多かり 建久建曆のころにいたりては あとにさかりなりけらし しか有てよりこのかた歌のしらべいうならず のどやかなるかたはあせはてて あまりにくくしたるすかたのみぞいで来にける(※2) さるはいさゝかもてむつかれと思ひかまふるまゝに あるはことえりし あるはこといみしつゝ真心のすぢをうしなふめり されはむねとして学ぶべきものにはあらざめれど うひ学びのともくちならさむためには いとよきはしだて(※3)にこそ かゝればこのごろ思ひおこして例の友たちにかたらへば みなうべなひてみつふたつよみいでたるをやがてみぎりひだりあはせとゝのへて 一とぢとはなしつされどまさりおとりさだめむは いとかたきわざなればいかにもせむすべなければ □□先生のみさだめをこひねぎ侍るになむ あはれやうなきいたづらわざするしれ人かなと あはめ※4にくみたまふらむをもわすれてなむ

安政四年十月

※1 げに物にみえたるハ在民部卿の家  
の社はじめなるべけれ

※2 此論おのが兼て思ひよれる処に  
なん 歌合といふこと出来て歌  
の本義ハうせはて侍り 此事お  
のれ別に書おける物はべり つ  
いであらんをりミせ奉らん

※3 初学のはし立といはれたる げ  
にさることに侍り

※4 あはめハおのれ別考侍り 今か  
たハし申さん あハはあわにて  
あわたゞしき意也 あわてあわ  
つの語を一轉してあわあわしと  
いひ そを今一轉してあわつか  
あわつけといひ 又一轉してあ  
わめとは申也 猶事長くはべれ  
ハふりはへとひ給ハゞ くはし  
く證を引て申侍らん

この序文中「□□先生のみさだめを」と  
先生の名が空欄になつてゐるが、これは  
「井上」とあるべきところを書き漏らした  
のであらう。転用する前の寺山吾鬢判の  
『百番歌合』序文には「小林先生のみさだ  
めを」とある(本来江戸の小林歌城に依頼

したが、多用の為小林の門人の寺山を判者  
にした由)。寺山は序文には何も書付なかつ  
たが、文雄は四項目にわたり、自分の感想を  
書いてゐる。

まづ歌合の始まりについて「在民部卿の家  
の社はじめなるべけれ(社は係助詞「こそ」  
と読む)」と述べる。現存の歌合は在原行平  
(在民部卿)が行つた、平安初期の仁和頃と  
されるものを最古とする。ここでもそれを取  
り上げ、文雄もそのことを「物にみえたるは  
じめ」としてゐる。

次に歌合は本来左右の歌の優劣を競ふ遊  
興的なものであつたが、時代の降下により歌  
の内容よりも技巧やその評を重視し、また作  
者の地位による評者の付度などがあり、ここ  
に見える鎌倉初めの建久頃には盛んになる  
一方で弊害も生じてきたやうである。文雄も  
歌合により歌の「本義ハうせはて侍り」と手  
厳しい。評は更に独立した歌論にまで展開す  
ることになる。文雄はこれに関して別に書い  
たものがあるので、それを序でがあれば見せ  
ると言つてゐる。

そのやうな歌合であるが、忠順は初心者に  
は「くちならさむためには いとよきはしだ  
て」になるといふ。これは左右に番へて比較  
することから歌の巧拙が明らかになること  
によるのであらう、文雄もこれには同感で

「げにさることに侍り」と書きつけてゐる。  
それで忠順は周囲の者に歌を詠ませ、それを  
左右に番ひにして一綴ぢの冊子にし、先生に  
評をお願いひしたのでといふ。これが本書の  
なる経緯であつた。

ところでこの序文の終りに「いたづらわぎ  
するしれ人かなと あはめにくみたまふら  
む」と忠順が書いたことに対し、文雄は「あ  
はめ」の語に対して、自分に別稿があるが、  
簡単に説明すると書きつけてゐる。この「あ  
はめ」は「あわてる」「あわたましい」のあ  
わであり、仮名表記はあはではないと指摘  
し、その説明をしてゐる。このことは文雄の  
『伊勢の家づと』二編に「あわあわし」と、  
項目を立てて書いてゐる(鈴木亮氏の教示)。  
忠順がなぜここでこのやうな聞きなれない  
語を用ゐたかはわからないが、文雄もまたそ  
れに興味を示して取り上げたのであり、更  
にご質問あれば「くはしく證を引て申侍らん」  
といつてゐる。二人の関係が思はれる書付で  
ある。

なほ次号から忠順の歌に対する文雄の評  
について見ていくことにする。



# 令和七年度活動報告

○五月十一日(日)

定例総会 出席者九十一名

★「第十九回忠順大賞」入賞者二十名

表彰式並びに講評

作品講評

久米翠雲先生

○六月二十四日(火)

第一回役員会 出席者十七名

★ビデオ「刻の遺産(村上忠順)」視聴

★顕彰会発足経緯について

★七年度事業・予算計画

★会費徴収について

○八月一日・九月五日・十月三日・

十一月七日 (各月第一金曜日)

四方樹大学 受講者延べ八十九名

★講師 名古屋大学名誉教授 塩村 耕先生

★講義 忠順翁の公用日記『座右記』の

読み解き

○九月三十日(火)

女性部研修会 参加者三十九名

★西尾抹茶文化と「岩瀬文庫を訪ねる」

★特別展「江戸の出版文化と葛屋重三郎」

「抹茶ミュージアム」見学



忠順大賞市長賞受賞者↑

○十一月二十三日(祝日)

第二回役員会実施 出席者二十名

★村上忠順翁墓参・千巻の舎碑と建物見学

★ビデオ「村上忠順物語(アニメ)」視聴

★顕彰会活動報告と意見交換

○十一月二十三日(令和七年一月三十一日)

★「第二十回忠順大賞」募集

★発表二月末日 応募総数一三三六首

★撰者 久米翠雲先生

○十二月十五・六・九日

前林中学校一年・三年のクラスの道徳の時間内において、忠順翁の紹介と、活動の目的なども紹介させていただいた。



作品講評

久米翠雲先生↓

○月二十九日(木)

「村上忠順翁生誕二百年記念プレート」を刈

谷市中央図書館記念樹

の前に設置

○二月二十六日(木)

歴史探訪

参加者四十七名

幕末慶応四年三月、有栖川宮熾仁親王の要請で、忠順は同二十五日駿府城入城。ボランティアガイドの案内で周辺を散策し当時を偲ぶ。

★日本平からの富士山展望(本誌表紙)。

★日本平「月日星(つきひぼし)」にて昼食。

★昼食後、市内駿府城公園へ移動。

○三月吉日

★叢書第二十六

忠順翁の『座右記』を読むⅦ 発行

三五〇部発行

★村上忠順翁紹介リーフレット発行

A四三つ折り 二千枚



紹介リーフレット



「記念プレート」

第二十回「忠順大賞」

(令和七年度)

入賞作品

・応募総数 一三三六首

・久米翠雲先生 選評

○小学生の部

豊田市長賞

駒場小学校二年 磯部 旭

にいちやんに手をひかれいった 学校へ  
つぎはいもうと ぼくが手をひく

※ぼくが一年生の時、兄がぼくの手をひいて学  
校へ連れて行ってくれた。今度はぼくの番。  
二人の姿が浮かぶ。兄弟愛がいいですね。

豊田市議会議長賞

堤小学校六年 奥 奏音

ありがとう毎日使ったランドセル  
小さく感じた六年生

※一年生の時は、ランドセルが重く大きく感じ  
た。おかげで、背も伸び、体が大きくなって、  
ランドセルが小さくなった。感謝の思いがい  
い。

豊田市教育委員会賞

駒場小学校六年 北島 蓮翔

年の瀬にいとこそろってしめ縄を

祖父に教わり笑いあふれる

※縄をなうこと自体少なくなった今。祖父に教  
わりながらしめ縄をなう。素晴らしい。上手  
くなえなくても。皆、和気あいあい。

中日新聞社賞

堤小学校三年 浦田 芳華

クリスマス サンタこないよまつてるよ  
だいこうサービスママサンタきた

※非常に楽しい。詠者は全て分かっている。下  
の句が現代っ子の感覚や生活の様子を理解し  
ている。すごいですね

会長賞 金賞

堤小学校三年 佐々木裕梨

ひとつずつリリースにおかしかったよ  
食べおわるころにはクリスマス

会長賞 銀賞

堤小学校六年 松川 柚華

遊園地ひとりでのったコースター  
さけびすぎだよ となりのおじさん

会長賞 銅賞

堤小学校四年 井村 梨杏

パズル会 さいごのつはめたとき  
さむい冬でも心ぼかぼか

優秀賞(三名)

堤小学校一年 杉浦 壮馬

さつまいもスイートポテトに大へんしん  
みんなでそだてた おもいでのあじ

駒場小学校六年 榎原 望来

いるかもなダイヤマークのその先に  
ゆっくり走り 止まってどうぞ

堤小学校二年 杉浦 伊織

どくしよはね あつというまにすぎっていく  
今日も行こうかひみつのせかい

○中学・一般の部

豊田市長賞

稲武町 林 泰子

夫(つま)逝きて一周忌すぎ秋の暮  
くせになりたるため息ひとつ

※夫が亡くなり一年経つのに想い出すばかり。  
秋の暮れは寂しさを誘う。下の句から切なさ  
が滲む。

豊田市議会議長賞

岩倉町 宇野真知子

子を育て夫を支えて家(や)を守り  
一途に生きて母は逝きたり

※下の句の「一途に生きて」から昭和の母親の姿が浮かびます。子、夫、家を守って逞しく生きた一生。

豊田市教育委員会賞

前林中学校二年 原 慧吾

息白くよいしよよいしよとつく餅で

地域をつなぎ 心はほかほか

※今はとかく地域をつなぐ力が弱まっています。自治区の大人から子供ら参加の餅つき行事。凄。

中日新聞社賞

前林中学校三年 金子 史佳

初運転助手席に乗り横を見る

気づけば姉は大人になって

※姉が車の免許を取る。初乗り。下の句は親の感覚ですね。姉弟仲良しの思いが伝わってくる。

会長賞 金賞

前林中学校二年 中村 美咲

おとうとと仲良く遊ぶサッカーで

姉は息切れ おとうと元氣

会長賞 銀賞

前林中学校三年 塩崎 伊織

三年間使い続けたカバン置き

ひらいて見れば新たな地図が

会長賞 銅賞

前林中学校一年 手寫 華葉

寒い朝祖父母と作ったかがみもち

冬を飾った大切な思い出

優秀賞（三名）

中田町

柴田 文志

秋に汗 老コンバインうなる音

豊作だぜと機械(あたま)をなでる

前林中学校一年 折田 歩結

秋の空響きわたる産声は

新たな命に家族は涙

前林中学校三年 石川 光咲

打楽器のリズムと鼓動重なって

指揮棒めがけ一音入魂

※無審査

「市長賞」授賞歴のある三名の方の優れた作品を無審査としました。

前林町

酒井 雅子

湯たんぽの昭和の漂う温もりは

母に抱かれた遠い日のよう

高岡町

早川 寛子

猛暑日の暮れて望月澄み渡り

眺める庭に虫の音流る

駒場町

清水 宣子

寒のうち籠もり進めし手仕事の

今日は仕上がる雛の絵キルト

会長賞以降の入賞者・無審査の作品につきましては、作者名と短歌のみの紹介とさせていただきます。

作品講評については別紙にて掲載。

### あとがき

前回のこの欄で「歴史探訪の行き先を東海道を東方面に進めば云々」と書き、今回も駿府城行きで三年連続となりました。今世に於いて、日帰りはこの辺りが限界であると痛感。密かに、この夢を来世に託そうと決めました。さて忠順翁、江戸行きは何度あったでしょうか？ 答は中澤先生寄稿文『忠順翁の明治十年の東京行』平成三十一年（会報 第三十号）に掲載されております。

村上忠順翁顕彰会事務局 寺田俊一